

審査の結果の要旨

論文提出者氏名 モハッラミプール・ザヘラ

本博士論文「20世紀初頭の日本における「東洋」概念の拡張——伊東忠太とその周辺の建築家・美術史家・歴史学者たちのペルシア観を中心に」は、1890年代から1929年頃までを対象として、近代日本におけるペルシア美術がいかにして、そしてなぜ、「東洋美術」の範疇に組み入れられていったかを、徹底的な文献学的実証と言説分析の双方から重層的に解き明かした浩瀚な研究である。

著者はこの複雑な歴史的経緯と言説の形成を解きほぐすために、主に三点の新しい視点を導入する。第一は、日本における「東洋美術史」の形成を探るにあたり、欧米と日本におけるペルシア美術に関するそれぞれの記述の変遷を徹底的に調べ上げること。第二は、ペルシア美術を記述し論じていた主体を、狭く「美術史」にのみ求めず、建築学、考古学、歴史学から美術市場、学術助成団体におよぶ範囲に調査を広げ、今までほとんど論じてこられなかった多くの人物や企業、団体の業績を、互いに関連付ける丁寧な作業を行ったこと。そして第三には、ペルシア美術史において、サーサーン朝に焦点を当てるこことによって、ペルシア美術をめぐる日本とヨーロッパの学術的な相互作用の様相をはじめて描きだしたことである。そこには、1935年に国名変更されたイランにおける、古代礼賛を特徴とするナショナリズムのイデオロギーもまた絡んでいることが、同時に意識されている。以上のように多国籍にわたる学術界・美術市場・外交などについて、歴史的に厳密な実証が積み重ねられていることが、何よりも、本博士論文の高い説得力を生み出している。

その上で、20世紀初頭の日本において「東洋美術」とは主に、「日本、中国とインド」を指す用語であったが、それが1920年代末に「西アジアとエジプトの美術」を含むに至った経緯は何か——著者は本論のこの中心的課題を解くための重要な人物として、建築家・建築史家の伊東忠太(1867-1954)を取り上げる。伊東忠太については従来、主に建築学分野での研究が進められてきたが、東西文化交渉史の中に初めて彼を大きく取り上げたのは井上章一『法隆寺への精神史』(1994年)である。井上は同書で、伊東が1893年の「法隆寺建築論」において日本をギリシャ中心主義的な世界建築史の中に組み込む企図を詳細に論じたが、モハッラミプール氏はその業績を受けてさらに、ギリシャではなくむしろペルシアとの関係で伊東を新しく読み直す重要性を提唱する。そして《四騎獅子狩文錦》(法隆寺蔵)の文様起源が、サーサーン朝であったことを当時認識した伊東忠太こそが、日本における「東洋美術史」の言説形成に決定的な役割を果たしたと見定めたのである。本論文では伊東忠太の活動を中心的に据えることによって、彼と交流の深かった建築家の塚本靖(1869-1937)や関野貞(1868-1935)、歴史学者の黒板勝美(1874-1946)、美術行政家の正木直彦(1862-1940)、美術史家の瀧精一(1873-1945)、田辺孝次(1890-1945)、矢代幸雄(1890-1975)などが取り上げられる。そして彼らが積極的に関わった美術出版、美術展や学術講演会、さらには同時代のペルシア美術関連商の活動などが有機的に詳述されることによって、徐々に形成されていった「ペルシア」観および「東洋美術」観の歴史的意味が明らかにされていくのである。

本論は全二部六章(および序章、終章)で構成されており、新出図版、新出資料を含む大部な別冊が付されている。

第1部「サーサーン朝の芸術の受容と「東洋芸術」の形成」では、1890年代から1910年代までの伊東の活動を中心に扱う。《四騎獅子狩文錦》のサーサーン朝起源説が、伊東の業績を通して国際的に定着するに至るまで、いかなる運命をたどったのかを実証的に浮かび上がらせ、また伊東の「東洋芸術」という概念の形成過程を追う。第1章「日本の美術史・建築史における東西の枠組みとペルシアの位置」では、明治期以降1928年までの西洋美術史、東洋美術史の概説書を網羅的に検討し、ペルシアを東・西美術史のどちらの範疇で捉えるかについての揺れがあることを確認する。その上で伊東忠太が明確に、サーサーン朝こそが日本の法隆寺や正倉院に遺る芸術の淵源とする建築史を編み出したことを再確認する。第2章「伊東忠太とサーサーン朝の芸術——「法隆寺建築論」から『文様集成』

へ」では、伊東忠太の1902-1905年のユーラシア大陸留学中、日露戦争下の制約でペルシアにこそ足を踏み入れなかったものの、サーサーン朝建築に深い興味を持続的に抱き、欧米の書籍をも通じて研究を深めていた様子を追究する。著者はそのために、伊東が遺した「野帳」と称されるフィールドノートを悉皆調査し、伊東が建築のみならず《四騎獅子狩文錦》のような「文様」に、サーサーン朝の影響を探る研究が始まっていたことを突き止めた。《四騎獅子狩文錦》は、1884年にフェノロサと岡倉覚三が法隆寺夢殿の調査で発見した織物で、現代では「サーサーン朝ペルシア由来の文様と織り技術を用いて中国で織った錦である」と同定されている。この文様の起源を日本で最初に研究したのは、歴史学の三宅米吉であり、三宅ははじめこれをアッシリア起源として考えていたが、考古学の鳥居龍蔵の論文などを受けてサーサーン朝起源と自説を訂正。伊東忠太はそうした国内の最新論を受けて、1898年の「法隆寺建築論」ではサーサーン朝起源と論じた。そしてこの伊東の論文は掲載図版と共に、フランス、ドイツ、オーストリアなどの東洋学者に逆に受容された模様を、著者は詳細に実証している。その成果を踏まえ、第3章「明治大正の建築界における「東洋芸術」」では、伊東が1906年に提示した「東洋芸術」の概念が1910年代までに、建築学会においてどのように展開されたのかを検討する。ここではとりわけ伊東、関野、塚本ら建築家たちが編纂に係わった『東洋芸術資料』(1909-1911年)および『文様集成』(1911-1916年)という二つの大型出版プロジェクトを悉皆調査し、とりわけ『文様集成』第56輯の内容と構成によって、サーサーン朝が日本の「奈良文様」の淵源であることを伊東らが明確に示していることを、具体的に論じた。これらの出版活動が当時の建築家たちにとっては、「東洋芸術」の再定義と、それによる新しい時代の建築創作への啓示を得ることを目指していたという読解もまた重要であろう。

次に、本論文第2部「まなざしが交差する地点——財団法人啓明会創立十年記念展覧会と東京帝室博物館におけるペルシアと「東洋」」では、1920年代に東京帝室博物館における「東洋」の概念が、従来の「支那」、「朝鮮」、「印度」から拡張され、「ペルシヤの辺」までとされた背景として、次の3つの要因を提示する。第一に、美術商の活動によって、ペルシア美術工芸品が数多く日本にもたらされたこと(第4章)、第二に、東京帝国大学国史学科教授であった黒板勝美のペルシア旅行の影響(第5章)、第三に、啓明会の創立十年記念展覧会(1928年)において展開されたペルシア美術をめぐる言説(第6章)である。第4章「1920年代日本の美術商とペルシア美術工芸品の展覧会」では、従来知られる山中商会、日仏芸術社の活動のみならず、村幸商店、蒹葭堂、フタバ商店などの実態を初めて浮かび上がらせた。これらの活動ではペルシアは「西」の世界と結びつけられる傾向にあったものの、伊東忠太が委員長を務めた啓明会の展覧会では、美術商の膨大な将来品が「東洋芸術」に組み込まれて展覧される。第5章「黒板勝美のペルシア旅行と東京帝室博物館における「東洋」の拡張」では、黒板勝美が、伊東が果たせなかつたペルシア旅行を実行し、1928年に始まった東京帝室博物館の復興活動でも活躍するなど、これまでほとんど知られなかつた事実を丁寧に叙述する。そして第6章「財団法人啓明会創立十年記念展覧会にあらわれるペルシア観」では、知られざる学術財団の実態と1928年の創立十年記念展覧会を取り上げる。この財団がペルシア研究に積極的に助成した成果と、展覧会を主催した主要人物であった伊東忠太、矢代幸雄、田辺孝次らの主張を分析することで、この展覧会がまさしく東京帝室博物館復興活動と直接連動し、それゆえに彼らが1929年の段階で「東洋」の範囲を最大限拡大し、「ペルシヤの辺までを入れてよい」と考えるに至つた経緯を解き明かした。

審査会では一致して、徹底的な実証研究がもたらした新しい知見と、平明で簡潔な日本語叙述の質の高さが評価された。そして著者が論文中で疑問としていた幾つかの点についての具体的な新情報がもたらされた。また今後は、地政学的文脈のさらなる解明、日本に招来されたペルシア文物のその後の詳細、コロナ禍で実施できなかつたイラン国内での資料調査の徹底などが求められた。しかしこれらの指摘は、あくまで今後の研究の進展と論文公表の際のさらなる希望として語られたものであり、本論文の価値を損なうものでは全くないことも確認された。

以上の審査結果を踏まえて、本審査委員会は全会一致で、本論文を博士(学術)の学位を授与するにふさわしいものと認定する。